鹿児島大学公開講座で気づき，つながる垂水のまちづくり

垂水市企画課職員　葛　迫　　洋

１．スタート

まず，鹿児島大学と垂水市の出会いから始まります。垂水市は，平成の大合併に向け「大隅中央法定合併協議会」に加入し，2005 年 1 月の「新市」誕生を目指し，職員も一丸となって準備していました。突如，合併協議会からの離脱を余儀なくされましたが，2004 年 3 月に「生き残りを課せられた今，当面は，単独市でやるしかない」と決意し，まず財政を立て直そうと 2004 年 4 月から「待ったなしの行財政改革」に取り組み，行革推進室（専任係）を設置し，市民の皆さんと一緒になって行財政改革を成し遂げることとしました。

そんな中，「ESD という言葉」と「鹿児島大学生涯学習教育研究センター」に出会い，当時，鹿児島大学のセンター長であった神田教授が，垂水市を「ESD（持続可能な開発のための教育）と地域づくり」のモデル地域にしたい，との思いを垂水市へ提案されました。垂水市は，この提案を受け，「これで垂水市の将来構想を作っていく」こととしました。つまり，鹿児島大学の力を借りて垂水市のまちづくり計画を作っていきたいと考えました。

２．これまでの取り組み

⑴　2005 年の取り組み

鹿児島大学からの「将来構想についての公開講座をやりましょう」と提案を受け，垂水市も「何となく」やってみました。「持続可能な」という言葉も分からず，とにかく人（参加者）集めに奔走しました。行政職員中には，大学の先生との認識の違いを指摘する者もいました。自治体職員は，直面している現場（地域）の問題・課題についての解決策を模索しているのだが，大学の先生方は，世界情勢を見ていて学術的な見解で終わってしまうのではないか，ということでありました。このように「現場を知らない大学の先生に地域のことが分かるはずがない」という厳しい批判もありました。そのことは，大学側が地域に入り意見聴取することで解決できました。しかし，大学と行政と間の「認識のずれ」の存在，このことは，実際，行政職員と市民（住民）の抱える課題の間にずれがあることも事実として浮き彫りになってきました。行政も地域の課題を理解しなければならないことを認識させられました。

公開講座は，2005 年 6 月に第 1 回目「地域資源の再発見」をテーマに実施しましたが，この時までは，どこが担当課で誰が担当者なのか不明確のまま講座を実施したということでした。

私は，定期の人事異動により 2005 年 10 月に企画課に配属され，それまで明確な担当のいなかった，この鹿児島大学公開講座の担当者となりました。担当になったのはいいが，何からどうすればいいのか，右も左も分からない状況に最初は，戸惑いばかりでした。以前，生涯学習教育研究センターの小栗准教授の「ESD 実践の報告」にもあったように「垂水市での公開講座の特徴は，『オーダーメード型』公開講座で，役割分担を大学側と自治体側で担い，あらかじめ提供する講座内容が決まっているのではなく，むしろその逆で，地域のニーズや課題に細やかに対応する講座メニューを，その時々の要請に応じて大学側が用意する点にある」と述べられているように，第 2 回目の講座開催に向けてどういうテーマ設定がいいのか，どういう切り口で誰を対象にする講座にするのかなど検討する事から始めました。大学側と何度も打ち合わせをしながら講座の内容を固めていきました。行政にとっても大学にとっても新しい手法での公開講座で暗中模索しながら企画し，開催していきました。

垂水市の将来改革と基本構想の作成を目指し，2005 年 6 月「地域資源の再発見」が最初の取り組み，2006 年 1 月「地域の暮らしの豊かさ」2006 年 3 月「これからの市町村経営に必要な持続可能な財政の考え方」3 回の公開講座を開催しました。

そのほか，2005 年 9 月台風 14 号による死者 5 名という悲惨な災害に見舞われ，住民の防災に対しての関心が高まっていたことをきっかけに，同年 12 月に防災シンポジウム「垂水を語いもんそ会～自分たちの地域は自分たちで守ろう～」を企画し，開催しました。開催までに参加者を集めるのに苦労しました。市民にとっては，「大学の先生

の話は難しい」という意識が強くあるようでしたが，行政も旗を振った以上，とにかく人を集めようと一本釣りで電話連絡をしたりして何とか開催にこぎつけました。結果として職員を含む 190 名の参加があり，皆一様に「講師の説明が分かりやすかった，垂水に住んでいながら実は垂水のことを知らなかった，自分たちの地域にリーダーが必要だ」など防災意識の高まりを感じる感想があり，シンポジウム開催の成果は大きかったと感じました。

このことがきっかけで次の年に発展講座「地域で防災マップをつくろう」の企画ができました。

(2) 2006 年の取り組み

2005 年の公開講座やシンポジウムの取り組みがきっかけとなり，各論の「森は宝の山」から「大野 ESD 自然学校構想」が生まれ，2006 年 2 月公開講座「地域で自然学校をつくろう」を実施しました。また，「防災シンポジウム」から 2005 年 12 月公開講座「地域で防災マップをつくろう」に発展してきました。

「自然学校をつくろう」は，①大人のための大野の大冒険②料理の達人，大自然の中の屋台村コンテスト③大人のための炭焼き科学教室④地域まるごと ESD 自然学校大作戦，全 4 回講座で延べ 136 名の参加で開催しました。最終回では，自然学校の実現に向け，参加者全員から様々なアイデアが出され，「ひょっとして！」という気持ちも生まれ，一歩前進しました。講座が終了してその後，「大野 ESD 自然学校研究部会」で具体的な設立構想を研究しています。

写真 1: 防災シンポジウム

写真 2: 公開講座「自然学校をつくろう」(森の音を調べる)

2006 年 10 月には，当初の目的でもあった「垂水市の将来構想策定（第 4 次垂水市総合計画）づくり」に取り組み，大学の全学的な協力をいましただくために 2006 年 10 月 18 日「垂水市と鹿児島大学との第 4 次垂水市総合計画策定に関する協定」を締結しました。協定締結に際して永田学長は，「大学の役割は教育・研究だけでなく社会貢献もある。今回の総合計画が日本のモデルとなるよう協力したい」水迫市長は，「大学の知見と市民の声で手作りの計画を作っていきたい」と決意を述べました。こうして「みんなでつくろう」をキャッチフレーズに総合計画づくりに取り組むこととなりました。

総合計画は，これまで民間の計画作りのプロであるコンサルタントへ委託し，一部の市民や審議委員の意見を拾い，行政主導で策定してきました。特にコンサルタントに依存する部分が大きかったようです。今回の第4次計画策定は，あえて今までのやり方を変え，市民と行政職員による手作りとし，みんなで汗をかいて行政職員だけでなく，市民が使える計画作りを目指しています。

まずは，企画課職員だけでなく，全庁的な理解と協力が不可欠なので職員へ「市民との手作り」という取り組みの説明会を実施しました。次に行政の方針，「市民との手作り」を市民に理解してもらうために「今からみんなでスタート

写真 3: 協定締結風景 (左：水迫市長，右：永田学長)

しましょう」と小学校校区にある9つの公民館で住民説明会を実施しました。この説明会にも工夫をし，ただ，説明するだけでなく，説明30分の後，小グループに分かれて説明会の理解度やまちづくりへの意見を拾う時間を取ることで，貴重な時間を割いて参加した全員に自分の意見を発表してもらい，まちづくり（総合計画）に関心を持ってもらうという狙いがありました。

この意見交換には，行政職員が1人ずつ入り座長を務めましたが，みんなの意見を聞いてまとめる（ファシリテート）ことが要求され，担当した職員にとっては，これまであまり経験のないことに戸惑いがありましたが，意見をまとめるテクニックの訓練にもなりました。何より説明会へ参加した市民の方から今までにない方法での説明会に対して評価していただき，行政の意気込みが少しでも伝わったと感じました。当然，反省点や次への課題も見つかり，特に説明会に関わった職員のスキルアップ，意識が変わりました。

説明会も一巡し，行政内部では，総合計画策定に向けたワーキンググループ（具体的・実務的な作業や調査をする集まり）を2つ設置，1つは，まちづくりを考える「総合計画策定ワーキンググループ，もう1つは，計画推進のための行政運営を考える「行政経営ワーキンググループ」，このワーキンググループを主体に総合計画策定作業を進めています。（2007年12月総合計画基本構想策定，その後の基本計画策定まで現在，進行中）メンバーはほとんどの課から若手職員，中堅職員から推薦，公募という形で選ばれましたが，率先して頑張ろうという人は一握りでした。

実際，作業に入ってみると集まった職員の意識の低さが顕著でした。確かに通常業務のほかに総合計画づくりに参画するということで会議の時間設定にもなるべく支障のない時間帯に設定するなどの調整をしてきました。

いよいよ鹿児島大学公開講座「総合計画をつくろう」の受講生を市民から公募し，企画，実施に入っていきます。講座のプランについては，鹿児島大学と垂水市で調整し，作り上げていきました。

第1回公開講座では，垂水市の現状分析し，受講生である市民へ統計データを分かりやすく整理し，ワーキングメンバーがパソコンのパワーポイントを使いプレゼンテーション（提示）を行いました。これまでも行政情報や事業説明会などでプリントを配付しての説明は，やってきていましたが，スクリーンに内容を映しだす，視覚的な提示方法は，あまり利用していませんでした。慣れない職員が現状を分析することも大変でしたが，それを分かりやすくプレゼンテーションすることと，短い期間に分析資料を作り上げ，発表するのにかなり苦労していましたが，受講生からは，様々な感想をいただきました。

感想・意見：「多くのデータの推移から現状が良く分かりました」「他の項目についても分析を聞きたくなった」「全く知らないことばかりでした」「第4次総合計画に期待します」「内容が単純すぎた」「良い面だけでなくもっと問題になる点を上げてもよいと思う」「できるだけ自分たちの事は住民の力を活用し，できる限り自分たちで解決するという心構えが必要である」「市民と行政間がもっと近づかなくてはならないと思う」「計画策定過程の大事さが分かった」

このような意見を十分汲み取り，2007年からの公開講座に生かしていく必要性を感じました。

写真4: 総合計画住民説明会（意見交換）

写真5: 公開講座「総合計画をつくろう」（基本構想編Ⅰ）

３．変わり始めた

鹿児島大学公開講座に取り組んで何が変わったのかということを振り返ってみます。

行政職員は，大学の先生方に議論をする方法を教えられ，実際に討論する場で「意見を引き出し，議論すべき目的を常に意識しながら意見をまとめる」という経験を通じ，ファシリテートする力を養うことができました。つまり，効率的かつ論点を明確にした議論の手法を学ぶことによって職員のスキルアップにつながりました。

私自身，公開講座に参加してみて，「気づき」がありました。日ごろ，思っていることを紙に書き出す作業をやってみて，思っていることが整理され，相手に分かるように伝えようとすることが出来，グループワークを通して共通点のない方と色々な情報を共有することができました。「自然学校をつくろう」の最終日には，「具体的な構想を作ろう」ということでみんな，思い思いの構想のアイデアを出し，中には，「アメリカ大統領を呼ぶ」とか「セレブが来る自然学校」など奇抜なアイデアが出てくる発想力に驚かされました。こんなに真剣に考える人が集まれば，きっと素晴らしい自然学校を作ることができると確信しました。

講座参加者，特に市民の方は，訳も分からず，いきなり「ブレーンストーミング（アイデアを生み出す手法）で意見を出してください」などと初めて経験することに戸惑いながらも何となくやっていくうちに場の雰囲気にも慣れ，活発な意見討論する力を持つようになってきました。一度でも参加した人は，次から抵抗なく議論できるようになってきました。

写真６：公開講座「自然学校をつくろう」
（学校構想のアイデア発表）

酒の席などで「地域づくりについて持論を語り散らす」というのはよくある事ですが，面と向かって議論する場を作り，議論する事は今までにあまりなかったことです。

公開講座を通して市民も職員も地域の課題について議論することができ，意見を共有することができました。

市民も行政職員も参加した人は，議論を深め，「現場から何が問題なのか，どういう取り組みをしていけばよいのか，自分たちで考えていくことの大切さ」に気づき，議論したことを次のステップにつなげるようになってきました。

「とにかくやってみよう」ということから始めた公開講座でしたが，講座に参加した人・関わった人が地域の将来を考えるようになっています。課題解決のために自ら関わろうという行動が今も持続していることが鹿児島大学公開講座を取り入れた大きな成果であります。

４．これからの課題

これから市民参画のまちづくりを進めるうえで大切なことは，ミーティングの場を持つこと，みんなで語って「何をしよう，何ができるか」を議論する機会を作ること，議論の場の作り方にも工夫が必要であること，また，議論をうまくまとめて誘導できる，リーダーシップ・コーディネートできる人を育てることである。できるだけ多くの方に関わってもらい，関心を持つようにもっと行政職員も積極的に参加し，市民の方々に参加していただけるような仕組みづくりが課題となっています。

今は，行政職員がある程度，誘導する形式をとっていますが，行政の後ろに市民がいることを認識し，次の行動につなげられる人材（市民）を育成することも必要なことです。

市の方針としても，「協働」という柱を掲げており，共生・協働の地域づくり事業を推進するためには，地域のことを考える人がもっと増えないと事業展開することも出来ません。地域の良い点も悪い点も地域に住んでいる人が一番良く知っています。地理的条件も捉え方ではプラスにすることもマイナスにすることもできます。

多くの市民に将来の垂水市への関心を持ってもらうことが今後の大きな課題の１つです。

総合計画づくりに対しても職員が一番頑張らなければならないが，その認識を高める，つまり意識向上に苦労しています。

職員の協力が必要ですが，一人ひとりの意識を変えていかなければならない。「市民の一員としての職員」という意識を全庁職員へ浸透させることは，困難ですが，あきらめずに進めていきます。意識改革が最優先なのですが，「人は，急には変わらない，変えられない」ことも見えてきました。しかし，きっかけ次第では，本気になる時が来ると信じています。

始めは，少人数でも繰り返してやっていき，少しずつ前に進めていくことが大切な事です。

2007 年には，総合計画づくり公開講座が本格的に動き出し，基本構想の策定という目標が見えています。この構想策定までの過程を一部の市民の受講者だけの意見にとどめることなく，総合計画作り講座に参加できない市民の声を反映することが必要です。各地域で座談会という形で中間報告を開催し，計画策定状況を理解してもらうと同時に批判も受けながら新しい総合計画づくりに市民総ぐるみで取り組むことが課題であります。

５．まとめ

鹿児島大学公開講座を始めて 1 年半，振り返ると ESD との出会いがあり，公開講座を通して「気づき」があり，課題が何かというのが見え始め，これからの垂水市の地域づくりをどうすればいいのか取り組む方法を見つけたような気がします。

正直言って鹿児島大学がここまでの対応してくれたこと，バックアップしてくれたことには，驚いています。多くの先生方とのネットワークを築くことができたことに感謝しています。

2005 年から「何となく」公開講座を重ね，各分野で議論してきたこと全てのことが「垂水市の将来構想」につながっていた事を実感しています。タイトルにもあるように「鹿児島大学公開講座で気づき，つながるまちづくり」を実践してきました。

2006 年は「垂水を全国のモデルにしたい」との思いで平成 20 年度からの 10 年計画，第 4 次垂水市総合計画づくりを「みんなで作る，市民と行政の手作りの計画にする」というコンセプトで取り組んでいます。

行政は，法律に基づいて権力を使える立場であり，一種の権力を持っています。行政がある程度は誘導し，市民が活動しやすい環境を作り，きっかけとなる施策を作っていかなければなりません。団体活動の活性化を目指す「たるみず市民活動ネットワーク」や地域に根ざした行政職員を目指す「地域担当職員制度」，地域自ら地域振興を考える「まちづくり委員会設置」といった取り組みも進めています。

本気で課題に取り組む人たちがいて，初めて行政の手の届かないサービス，かゆい所に手が届くまちづくりができるのではないでしょうか。

まちづくりには，住民・行政・企業・NPO 等を含めた地域全体のコンセンサス（合意・共感）が必要だと感じています。

今後の垂水市は，3 つの視点「改革」「協働」「前進」を念頭に置き，経済，環境，福祉のそれぞれの領域が調和のとれた地域の発展「持続可能な垂水」を目指していきます。

まだまだ，走り出したばかりですが，「持続可能な地域づくり」に向け，行政と住民との新しい関係を築き，垂水市の地域資源と人材と鹿児島大学の知見を連携させ，まちづくりに取り組んでいきます。

鹿児島大学公開講座で気づき、つながる たるみずのまちづくり

垂水ESD研究協議会

■鹿児島県垂水市の概要

垂水市は人口　18,388人（H19.3.1）、面積162.01k㎡の「花と渓谷と温泉のまち」です。鹿児島県大隅半島の玄関口に位置し、恵み豊かな錦江湾と優美な桜島を目の前に望む緑豊かなところです。

垂水という名前も、その昔シラス台地の下から水晶のような清水が湧き出て、道行く人々がひたひたと垂れる水の様子を見て、垂水といわれるようになったという一説もあります。

■要約

①スタート

垂水市は、突如、合併協議会離脱を余儀なくされた。「当面は単独市でやるしかない」と決意した時「ESDという言葉」と「鹿児島大学生涯学習教育研究センター」に出会い、垂水市は「これで将来構想を作っていく」こととした。

②きっかけ＆これまでの取り組み

鹿児島大学からの「将来構想についての公開講座をやりましょう」と提案を受け、2005年度に3回、公開講座を開催、防災シンポジウムを同年12月に開催した。

③何が変わったのか

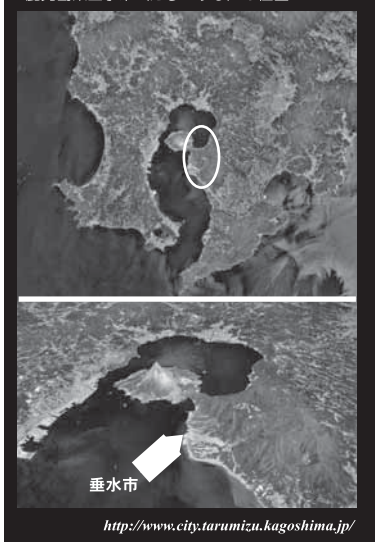
「とにかくやってみよう」ということから始めてみたが、講座に参加した人・関わった人が地域の将来を考えるようになっていた。課題解決のために自ら関わろうという行動が今も持続している。

④これからの課題

これから大切なことは、ミーティングの場を持つこと、みんなで語って「何をしよう、何ができるか」を議論する機会を作ること、議論をうまくまとめて誘導できる、リーダーシップ・コーディネートできる人を育てることである。

⑤公開講座を通して「気づき」があり、各論で議論してきたこと全てが垂水市の将来構想に「つながっていた」

鹿児島県垂水市（たるみずし）の位置



http://www.city.tarumizu.kagoshima.jp/

取り組みの出発点

きっかけ
平成の大合併
合併協議会からの離脱
２００４年３月
単独を選択
２００４年４月
行財政改革を開始

公開講座に参加してみて
何となくの「気づき」

2005年 2月

垂水市と ESD との出会い

鹿児島大学
生涯学習教育研究センター
小栗助教授

鹿児島大学の公開講座を
とにかくやってみよう！
スタートとしてのテーマ
地域を知ることが大切

垂水市はこれで将来構想を作っていく

2005年6月　第1回公開講座
垂水市の将来改革と基本構想
地域資源の再発見
４つの地域資源
山・海・人・ゴミ

●持続可能なという言葉に引かれた
●最初は意味が分かっていなかった
●行事として実施したのは企画課
●とにかく人を集める

①山：森は宝の山
鹿児島大学 農学部
井倉助教授

②海：垂水には海もある
鹿児島大学 水産学部
大富助教授

③人：垂水は人育ての宝庫
鹿児島大学 教育学部
神田教授

④ごみ：世界の中の垂水
鹿児島大学
生涯学習教育研究センター
小栗助教授

平成17年台風14号災害（死者5名）

今一番の関心は何か？
→　台風災害

10年ぶりの
大災害に
住民も防災を
考える

シンポジウムをしよう
（大学側より誘い）

2005年12月 防災シンポジウム
「語いもんそ会」
**～自分たちの地域は
自分たちで守ろう～**

人集めが大変、電話連絡、各課へ割り当て
＝　結果、人が集まった

具体的な話に参加者納得できた
大学という肩書き

2006年7月　公開講座
**防災マップを
つくろう**
総務課

集落ごとにマップを作成
＋成果：自主防災組織率アップ

**課題④
循環型社会「垂水モデル」**

総合計画

**課題⑤
安心安全のまちづくり**

①山：森は宝の山

大野ESD自然学校構想

2001～「子ども森林教室」
キーマン：井倉先生
（鹿大農学部助教授）

方向性・目標
①コミュニティビジネスか？
②森林環境教育か？

大野小中学校閉校
2006年3月　閉校式

閉校後の利活用は？

地区内の家庭訪問：職員が声かけ
～活性化策をやりましょう～

2006年6月
準備委員会開催
住民もテーブルにつく

条件：地域住民が主役

自然学校づくりを進めていいか
住民の同意を伺う

2006年12月　公開講座
地域で自然学校をつくろう

・地域活性にどう関わるか？
・全国モデルになる学校とは？
・高齢者の生きがいになるか？

課題①
共生協働のまちづくり

→ 総合計画

やってみて分かった

- 講座に参加した人・関わった人が地域の将来を考えるようになっていた
- 課題解決のために自らかかわろうという行動が今も持続している
- 公開講座を通しての「気づき」があり、各論で議論してきたことが全てが将来構想につながっていた

これから大切なことは

（1）ミーティングの場を持つこと
～語って何をしようと議論する～
（場の作り方の工夫）

（2）リーダーシップを持てる人
コーディネートできる人
（人材育成）

垂水ESD研究協議会は、持続可能なまちづくりに向け、垂水市の地域資源と鹿児島大学の知見を連携させ、地域づくりを研究していく。

2007年2月
ESD地域ミーティング in 垂水

琉球大学 観光科学科
大島助教授

猿ヶ城渓谷の開発から始めよう！
商店街を元気にする方法と垂水の観光まちづくり

錦江湾資源を使ったまちおこし

地域資源
漁業・農業・林業・商工関係

海を地域へ・産業との連携

課題②
地域ブランドづくり

→ 総合計画

課題に「気づき」、
議論を深め、
気づいた課題はすべて
将来構想につながっていた

垂水市・鹿児島大学　　2006年10月
第４次垂水市総合計画策定に関する協定締結

課題①～⑥
垂水市の将来構想のテーマ

2006年1月　第2回公開講座
垂水市の将来改革と基本構想
地域の暮らしの豊かさ

議論白熱
学校教育⇔地域公民館活動

対象
教育関係・福祉関係・公民館関係

世代間交流
地域を舞台に

地域の声
現状

課題が見えかけたけど・・・中途

学校の先生へつなぐ

中学校の統合問題に

課題③
子どもが笑顔で暮らせるために・・

2006年3月　第3回公開講座
垂水市の将来改革と基本構想
これからの市町村経営に必要な
持続可能な財政の考え方

行政経営

対象　行政職員

行財政改革　の強化

課題⑥
行政経営の見直し

→ 総合計画